
誰よりも笑って

珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰よりも笑って

【Nコード】

N0846Y

【作者名】

珀

【あらすじ】

10/31といえば…彼女を中心に過ぎるとある一日の午後のお話。ハロウィン企画。

「とりつく おあ とりーとアル!! お菓子ちょーだいヨ銀ちゃん!!」

10月31日の12時半くらいのこと、午前中に友達と遊んできた神楽は覚えてたての魔法の言葉を唱えていた。

「はあ?なにいつてんのかな神楽ちゃん? ったく昨日オメーが炊飯器壊してくれたお陰でいくら損したと思ってやがんだ。ガキは外で遊んでろ」

しかし、万国共通のマジックワードも万年金欠の万事屋では効果が無いらしい。

神楽は銀時の言うとおりにするつもりは無かったが、取り敢えずは外に飛び出した。

「んだヨー! 銀ちゃんのケチがー!!」

パタン…

「銀さん…」「おー」

・万事屋を出た神楽は、ハロウィン一色に染まる街を大股でずかずかと進んでいく。

「んだヨー！！可愛い家族にお菓子一つもくれないのかヨー！！」

そこに通りかかったのは買い物袋を提げた新八の姉、お妙だ。

「あら、神楽ちゃん？なにを怒ってるのかしら…」

「おっ 姐御アル！！買い物アルカ？ねえねえ聞いてヨ銀ちゃんが
さア…」

神樂が愚痴を零し終えると、お妙は袋とは別に持っていた風呂敷を差し出す。

「まあ…全くだうしようもない人ねえ銀さんは。ほら、このお菓子並に甘い卵焼きをあげるわ。だから元気だして！」

「…あ、ありがとネ 姐御。ばいばーい…ってアレ？今日って…」

若干冷や汗を掻いてしまったが、神樂はとりあえず また歩きだした。ちよつとした街の外れで路地からいきなり飛び出てきた人物とぶつかった。

「なにしてるネ。怪我してないアルカ？って…」

「ん？リーダーではないか…こんな所で何をしているんだ？」

そついつて立ち上がる桂が身に付けているのは漆黒のマントと、か

ぼちやのカタチをした鮮やかなオレンジ色のパンツ…

「オメーに言われたくねーヨ。攘夷はどうしたネ…変な趣味ができたアルカ。めっさキモイアル…近づかないでヨ」

「これは断じて趣味などではないわっ！！攘夷をするにはバイトも必要。ハロウィンだからな、グッズを売っているんだ。どうやらしるくはつととやらを付けければ雑魚らんととやらになれるらしい。リーダーも覚えておけ。」

「全然違エーヨ。心配しなくてもオメーの頭はもともと雑魚アル。じゃあナ。」

そういつて立ち去ろうとした神楽の肩に桂の手がかかる。

「まてまてっ リーダーにはコレをやるっ…ハロウィン限定のんまい棒 魔女味だぞっ！」

「魔女味ってなにアルカ…訳わかんねーヨ。でも、コレは貰ってやるアル」

風呂敷とんまい棒の入った袋を振っていた神楽は大通りに出た所で嫌そうな顔をしたが、いつもとは違い彼は何故か近づいてきた。そして神楽を見るなり首を傾げる

「あり？チャイナじゃないですかイ…さては家出でもしたんだろイ。訳のわかんねー荷物でさア」

「別に…違うアル。馬鹿なコト言ってねーでさっさと働くヨロシ。税金ドロボーが」

「今日はハロウィンっつーことで仕事も休みなんでイ…これをやりまさら」

「んな訳アルカっ！…ん？ケーキ…っ！」

沖田から手渡されたのは小さなケーキ屋さんの箱だった。

「土方のヤローに食わせてやるつもりがバレちまいやして…チャイナにやりまさア…じゃーな」

「オイっ！待てヨー 車で逃げるなんてズルいアルー！」

神樂の叫びも虚しく沖田は迎えにきたパトカーに乗って帰って行ってしまった

「もういいアル。どいつもコイツも…荷物いっぱいになっちゃたネ。帰ろー」

そうこうしているうちに夕暮れである。神楽は万事屋までゆっくりと歩いて帰ってきた。

ガラガラっ

「ただいまヨー！」

「あっ 神楽ちゃんお帰りっ」

「なに焦ってるアルカ新八？…いい匂いがするネ。なにこそこそやつてたアルカっ？」

「すぐにわかるよ。ほら、早く手を洗って」

仕方ないので手を洗い、居間に入った途端

「え？」

「ハッピーハロウィン、神楽ちゃんっ！！」パーンっ

かわいらしい音を發てたのは3つのクラッカー。糖分と書かれた額の下に下がる幕には大きくHAPPY HALLOWEENと書いてある。

「なに固まっただ、神楽？オメーの誕生日も近エーし、女子供はこーゆーイベントが好きなんだろーが…なに、泣いちゃった？」

「んなんじゃねーヨ…お腹が空きすぎただけアル」

「神楽ちゃん、このお料理とデザートは銀さんが作ったんだよ。神楽ちゃんの為にね…僕達も買い物にいたり、神楽ちゃんを引き止めたり、飾りつけをしたりしてたんだよ、気がつかなかったでしょ。」

「実はあのんまい棒の魔女味はリーダーの為の特注品だから、心して食べるがいいぞ！」

テンションの高い3人だが、神楽は一つ、とても重要なことに気づいていた。冷めた声で言い放つ。

「いや、訳わかんないアル。10/31なのに何故ワタシにサプライズアルカ。おめーら、もしかして姉御の誕生日忘れてたアルカッ！？」

「あ…あつ違います。ギリギリで気づい…もう呼んであることに代わりはないから、神楽ちゃんのはサプライズの予行練習みたいな…ねっ 帰ってきたらいきなりパーティーやってたとか嫌だろっ」

「まあ、そうアルナ…当日になってから姉御の誕生日に気づいた作者が、とりあえずこっからの話全部変えようとするなんて、よくアル話アルナ。」

「あの…あんまそういう事言わないでくれる 色々大変だから…つか 神楽、悪いけど、お妙出迎えるの手伝ってくれねーか？」

「クラッカー鳴らすアルカ！？やりたいアルっ いっぱい頂戴ヨ！」

「わっ 神楽ちゃん待って、危ないよ…」パーンッ

取り合いになり、クラッカーが暴発してしまった

「あー残り少ないクラッカーが… もういい、取り敢えず各自スタンバイしろ、そんでもってツラは帰れ。真選組がくる。」

「仕方なかつ、お妙殿に言っておいてくれ おめでとつ、と」

桂が窓から出ていってすぐ、万事屋のチャイムが鳴った。

「よしっ 来たぜ。最終確認だ。あと、神楽は真選組に変な事すんなよ、ゴリラのおかげで資金提供があつたんだからな」

…

居間にゆつくりとお妙が入ってくる。そして、息を潜めていた3人と、後ろにいるお妙を連れてきた3人がクラッカーを盛大に鳴らした。

「えっ？」

「お妙さん、お誕生日おめでとぅっ！」

そう言ったかと思うと神楽が駆け寄り、小さな四角い箱を渡す。お妙は笑って受け取り、神楽を抱き締める。

「ありがとうね、みんな。神楽ちゃんも、ほら…ハロウィンパーティを始めましよう？」

(後書き)

ゴメンナサイ。お妙さん大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0846y/>

誰よりも笑って

2011年11月11日09時27分発行